

## 自己の状況依存性と言語による分析の可能性

その他のタイトル	The Possibility of Analyzing the "Situational Self" with Language
著者	木村 竜也, 西田 晃一
雑誌名	情報研究 : 関西大学総合情報学部紀要
巻	4
ページ	67-83
発行年	1996-03-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020361">http://hdl.handle.net/10112/00020361</a>

## 自己の状況依存性と言語による分析の可能性

木村 竜也<sup>1</sup>・西田 晃<sup>2,3</sup>

### The Possibility of Analyzing the “Situational Self” with Language

Tatsuya KIMURA

Koichi NISHIDA

#### Abstract

In this paper, we consider the “Self” constructed by the interaction between ourselves and situations. We use the term “Situational Self” in this sense.

First, we briefly review some traditional theories of “Self”. Most traditional theories of “Self” have regarded the “Self” as an entity. According to these theories, situations around us influence the Self from the outside.

Second, we explain the “Situational Self”. Contrary to traditional theories, the “Situational Self” can be regarded as the product of social construction. “Social Constructionism” also gives attention to such construction. From the aspect of this epistemology, the “Self” must depend on the individual's situation. We can define our “Self” only in the social context. Potter & Wetherell(1987) suggested that this kind of Self can be grasped by analyzing the written and spoken language used by the individual. We introduce “Protocol Analysis” and “Discourse Analysis” as appropriate analytical tools.

Lastly, we analyze two kinds of discourse, one is from Reicher and Potter's research of the riot of St. Pauls, and the other is reports which were written by three university students. Through these analyses, we can exemplify the possibility of analyzing the “Situational Self” with language.

---

1 関西大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程後期課程

2 関西大学総合情報学部専任講師

3 本研究の進展には、平成7年度秋学期、関西大学総合情報学部において開講された基礎演習18組の学生諸君の貢献がありました。彼らの討論やレポートが、研究を進めてゆく上で非常に参考になりました。謝意を表します。

## 1. はじめに

私はどこから来たのか？ 私はどこへゆこうとしているのか？ そもそも、私とは何者なのか？ 本研究は、この間に端を発している。そして、その答えを探すべく模索を行っている。

心理学では、古くからこの“私”に関する様々な概念が生み出されてきた。自己、自我、アイデンティティ。こうした概念の多くが、“実体”としての自己が存在すると仮定している。本研究では、この仮定を見直すことから始める。果たして、我々には“実体”としての自己などあるのだろうか？この間を検討する手がかりとして、Gergen (1987, 1991) に代表される社会的構成主義 (social constructionism または social constructivism) と、その立場から導き出される“自己”を検討する。この立場に立つとき自己は、自己をとりまく社会などの“状況”との相互作用を通して構成されることになる。つまり、各人が、各人のおかれた状況との関係性を認識することによって自己は明らかになる。このような自己を本研究では状況依存的自己 (Situational Self) と呼ぶ。

こうした状況依存的自己はどのようにして捉えられるのか。本研究ではこれを、談話分析 (discourse analysis) に求める。研究の対象となる個人によって直接“語られた”、つまり言語報告をデータとして分析しようというのである。ここでは、Reicher と Potter (Reicher, 1984 ; Reicher & Potter, 1985 ; Potter & Reicher, 1987) がセント・ポールズ (St. Pauls) で起こった暴動に関連して集めた談話 (彼らはこれを集団間葛藤と群集行動を分析するために用いている) と、大学生によって書かれた自己についてのレポートをデータとして、談話のなかに現れる“状況”と“自己”の分析を試みる。

## 2. 従来の自己研究

心理学においては、そのパイオニアたちが自己の問題を取り上げて以来、非常に多くの研究者たちがその問題を論じてきている。ここではそれらの研究のうちからいくつかを概観し、特にそれらの論において社会などの状況がどのような位置付けにあるのかをみてみることにしよう。本研究では、様々な状況において個人が自分自身をどのように説明し定義するのか、自己の現れ方を捉えるにはどのような方法が可能か、を考察していくと先に述べた。そのためには自己と状況がどのように関連しているのかをまず述べておく必要があるであろう。

心理学のパイオニアの一人である James (1968) は自己を“主体としての自己 (I)”と“客体としての自己 (me)”に分けて論じた。前者は認識者としての自己であり、心理学において一般的に自我 (ego) とも呼ばれるものである。後者は認識される側、つまり対象としての自己であり、これには自己に所属するものすべてが含まれる。一般的に自己 (self) という場合この側面を指すことが多いようである。自己のこの面は非常に幅広いものであり、James はそ

の構成要素として物質的自己・社会的自己・精神的自己をあげている。物質的自己とはその人の身体や家族、財産などその人に属している物的なものを指している。社会的自己とは他者がその人に対して行った評価などを指している。精神的自己とはその人の感情や欲望などの精神状態を指している。Jamesにおける状況は社会的自己の点に考慮されているものと思われる。この点に他者の存在を取り入れることで状況を考慮しているのである。ただし他者の見方である社会的自己という概念を導入してはいるものの、それがその人の自己の形成の仕方やあり方にどのような影響を及ぼすのかという点は明確ではないようである。しかし少なくとも心理学においては、その当初から自己研究に状況という視点が導入されていたのである。

Mead, G. H. (1934) もJamesと同様に自己を主体と客体の2つに分けて論じている。そしてJamesよりも積極的に社会的状況という視点を取り入れている。自己は他者を含む社会的状況との相互作用によって発達してゆく。自己は他者の自分に対する態度を自分の中に想定し、それに応じることで発達してゆくというもののようである。Meadの論では、自己は社会的過程の所産であり、状況の自己への影響が非常に大きなものとして扱われている。

Allport, G. W. (1955) は、プロプリウム (proprium) という概念を提唱している。プロプリウムとは、個人に本来的に独自のものという意味を持ち、固有我などと訳されていることがある。これは、個人が自分自身のものと見なしているすべてを包括するものである。Allportは、プロプリウムの8つの機能の諸側面をあげている。つまり、(1)身体感覚 (bodily sense) ・(2)自己同一性 (self-identity) ・(3)自我高揚 (ego-enhancement) ・(4)自我拡張 (ego-extension) ・(5)合理機関 (rational agent) ・(6)自己像 (self-image) ・(7)固有的希求 (proprium striving) ・(8)認識者 (knower) の8つである。ここではこれらの8側面の各々についての詳しい説明は避けるが、これら8側面のうち自我拡張には、他者や集団、国家、あるいは価値といったものを自分のものとして取り入れていくという機能があるとされている。そしてこのプロプリウムの発達には社会化が重要な役割を果たすとしており、この点にも社会という状況の影響が考慮されているといえよう。

次に精神分析学派における捉え方を見てみよう。周知のとおり精神分析学の創始者はFreud, Sである。彼は、適応規制という観点から、人間の精神の構造をイド (id) ・自我 (ego) ・超自我 (super-ego) の3つの部分に分けて論じている。このうちイドは人間の生物的側面を指し、超自我は社会の道徳的な規準が内面化されたもの、そして自我は状況と生物的な衝動、および道徳的規準との間の折り合いをつける機能を持っている。この論には社会や個人のいる状況という視点が含まれてはいるが、状況に主眼がおかれたものではないように思われる。Erikson (1959) はFreudの自我の機能を更に拡大して論を展開した。彼は、人格の発達を、アイデンティティ (identity) の心理-社会的発達の過程として捉えている。つまり発達過程への文化的・歴史的な要因の影響を理論化している。Eriksonのアイデンティティ論における状況とは、社会的・文化的・歴史的なものと言えるであろう。

ここまで、従来の研究で、状況がどのような位置付けにあるのかを見てきた。それらの研究

では各々の仕方で状況と自己が関連づけられている。しかしいずれも概念的であって、その時々における自己の現れ方、という具体的な次元で自己を捉えようとする場合には必ずしも適しているとは言えないであろう。またMeadやAllport、Eriksonは、自己や人格の発達過程において、他者や社会などの状況が影響するとしている。彼らが述べているのは発達に注目した場合の状況の影響であり、発達という構造化の過程ではなくその時々でその影響を受けた自己というものは次元が異なっていると思われる。また精神分析学派の場合、治療を想定した人格論であり、適用されうる状況は非常に限定されているのではないと思われる。

比較的最近の研究では、状況はどのような位置づけにあるのであろうか。ここでは日本の研究者によるものを見てみよう。

梶田（1988）は、非常に幅広い範囲で過去の研究を概観し、自己意識という観点から自己の様々な側面を論じ、自己研究が心理学においてもっと重要な位置を占めるべきだと述べている。この研究においても自己への状況の影響という視点は保持されている。特にCombs & Snygg（1959）やRogers（1951）の、いわゆる現象学的心理学の立場を導入して、個人の行動を理解する時にはその個人の内的準拠枠が非常に重要だと述べている。この内的準拠枠の重視は、個人の状況の捉え方を重視したものと思われるが、具体的にそれをどのようにして研究するべきかという点までは言及していない。

辻（1993）は、自己意識と密接な関連があるものとして他者意識を取り上げている。他者意識とは“他者へ向ける注意、関心、意識”（1993, p.149）であり、この場合の状況とは主に他者の存在のことと思われる。

中村（1990）は、まず初めに自己が社会的過程の中で生じ機能するとし、自己過程という概念を導入している。つまり自己過程は、社会的な状況の影響を大きく受けると考えているようである。自己過程とは、“自分が自分に注目し、自分の特徴を自分で描くことができるようになり、その描いた姿についての評価を行い、さらに、そのような自分の姿を他人にさらけ出したり、具合の悪いところは隠したり修飾したりする一連の現象的過程”（1990, p.13）と定義されている。個人が何らかの刺激を受けた、その刺激に反応するまでに介在するものが自己過程であるというのである。つまりS-O-RのパラダイムにおけるOの部分に自己過程に相当し、Sの部分に状況に相当するのである。

私たちは日常において様々な自分を持っている。仕事などの公的な場面での自分と休養時などの私的な場面での自分では異なるであろうし、更に細かく言えばその時々場面にいる他者によって、またその時々やるべき事柄の内容によって自分は違ったあり方をするであろう。つまり状況によって自己は様々な変化するのである。加えてその状況とは、同じ状況であったとしても個人個人によって捉え方が異なることがおおいにあり得る。このような個人的な状況の捉え方と、それに伴って現れ方が変化するという性質が本来的な自己だと考えるならば、上記の研究ではそのような自己を捉えきれていないのではないだろうか。つまり自己を直接的に捉えるためには個人の状況に対する意味付けを含めて見ていかなくてはならないのである。こ

れはある点でこれまでの自己研究の多くに言い当たることだと思われるが、従来の研究では、状況を研究者側がいわば恣意的に規定しており、このことが、暗黙のものであったとしても前提となっているために、状況と密接に結び付いている自己を捉えきれていないと言えるのではないだろうか。特に最近の研究の場合、実際の研究方法として質問紙が使われることが多いが、質問項目に記述されている状況に対する研究者の意味付けとそれを読む被調査者の意味付けとが完全に一致しているとは限らない。ところが現状ではその両者の状況への意味付けが一致しているという前提が置かれているか、あるいはそれらに違いがあり得るということに気付かれていないかのいずれかであると思われるのである。

### 3. 状況依存的な自己

これまでの議論で、自己を直接的に捉えるためには、個人の状況に対する意味付けを含めて見ていく必要性が明らかになった。ある個人の状況に対する意味付けとその個人の自己は密接に関連しているのであり、この意味で自己は状況に依存しているのである。このような状況依存的な自己の把握が可能なのであろうか。ここでは状況によって人間の心的現象が規定されるという視点を持った認識の立場を紹介し、その立場から自己をどのように把握することができるのかを述べることにしたい。

#### 3.1. 社会的構成主義

ここで紹介する認識の立場は社会的構成主義 (social constructionism, social constructivism) と呼ばれているものである。この立場は比較的新しいものであり、記号論 (semiology) やポスト構造主義 (post-structuralism) の影響を強く受けたもののようなものである (Potter & Wetherell, 1987)。ここではその哲学的な背景を述べるよりも、社会的構成主義の中心的研究者である Gergen の論を簡単に紹介することにする。

Gergen(1973)、Gergen & Gergen (1984) は、社会心理学に歴史という視点を取り入れた歴史社会心理学を提起している。従来の社会心理学にはこの視点が欠けており、それは心的事象を歴史的に不変なものとして捉えている、というのが彼らの主張である。つまり、心的事象が歴史的な状況の変化に影響されて変容することのない実体として捉えられているのである。彼らの提起する社会心理学は、歴史の視点を取り入れ、歴史的に変化していく人間の“相互作用”を捉えるものである。彼らは、歴史という時間的な状況が人間の心的事象に影響を及ぼし、それを変容させるとしているのであり、この点を考慮に入れた研究の必要性を主張しているのである。例えば、思想という心的事象は時代によって、その時々背景となっている社会状況の影響を受けて成り立っているものであろう。そもそも人間の思考様式そのものが歴史の影響を

受けるものだろう。そのように考えれば、確かに彼の主張するところは正しいと思われる。

このような歴史の影響は、他の心理学者も指摘するところである。Sampson (1985, 1989) は、歴史をプレ・モダン、モダン、ポスト・モダンの3つに分け、各々の時期にその社会を構成している単位が異なるとしている。プレ・モダンでは集団、モダンでは個人、ポスト・モダンでは“世界的規模のもの (globalized functional unit)” が単位となって社会が構成されており、各々の時期にはそれぞれの人間のあり方があるとしている。Sampsonの指摘はかなり抽象的で、それがそのまま具体的な日常生活を送っている人間の意識やあり方に反映されているのかどうかについては考察する余地があると思われるが、彼も歴史という状況を考慮した心理学研究の必要性を説いているのである。Gergen (1991) もまたSampsonと同様に歴史を3つに分け、それを自己研究に適用して考察している。

Harré (1993) は、自分自身Gergenの社会的構成主義と一致するところが多いとし、状況として歴史的なものに加えて文化的なものも指摘している。そして彼は、状況を重視する立場から、自己を実体とか属性ではなく、位置づけられるもの (location) としてみなしている。更に自己についての感覚とは、空間的・時間的にある位置を占めているという感覚であるとしている。

上述のように社会的構成主義は、個人と状況との結び付きを強調しており、それは個人の心的現象が状況によって構成されるものだとする立場である。その心的現象には当然、自己に関するものも含まれている。とすると、社会的構成主義の立場からは、状況依存的な自己がうまく捉えられるのではないかと考えられる。

またHarré (1993) は、個人にとっての状況について、それは個人が所有しているもの (proprietorship) としている。つまり個人にとっての状況とは自分と関連があるものということのようである。この場合、その状況を自分と関連しているものとするのは他ならぬその個人であり、すなわち状況へのその個人の意味付けが伴っていると考えられる。例えばその状況のひとつが他者である (Gergen, 1987)。個人は自己を、他者との関係あるいは相互作用によって形作っていくのである。また状況が集団とか事物、あるいはもっと抽象的な価値などの場合もあろう。この場合もそれらの対象との相互作用の中で自己が形作られていくのである。社会的構成主義での自己とは状況に依存したものであり、そしてその状況とは個人が意味付けたものなのである。前に従来の自己研究は、状況を研究者側が恣意的に意味付けたものであると述べたが、社会的構成主義の場合、状況は個人の側が意味付けたものとなっている。また従来の研究では、状況が個人に及ぼす影響を具体的に捉えていくには限界があると思われるが、社会的構成主義では、その状況を個人が捉えたものとして具体的に見ていくことが可能であると思われる。

#### 4. 言語による分析 —— プロトコル分析と談話分析

個人の状況は、その人だけのものである研究者が与える“状況”（例えば質問紙の項目）と、協力者が捉える“状況”とが一致している保証はない。偶然両者が一致したとして、そこで捉えられる“自己”は、研究者の自己像を協力者に投影したにすぎない、という可能性が残る。つまり、そこに協力者の自己が現れている保証はない。それでは、研究者が、協力者の“状況”を捉えることのできるデータがあるか？あれば、研究者が、協力者の“状況”を恣意的に解釈することを避けられる。

Potter & Wetherell (1987) は、Gergenらの社会的構成主義の影響を受けて社会的状況における様々な心的現象を談話 (discourse) を用いて研究している。彼らは、自己を実体として捉えることを批判し、文化的・歴史的状況への自己の依存性を重視している。そして、自己研究は、自己の構成のされ方の多様性と、自己が社会的文脈あるいは対人関係においてどのように規定されているのかに焦点を当てるべきだとしている。彼らは、言語行為 (linguistic practice) には、自己を概念化し個人を社会の中に位置付ける機能があるとしている。言語にもしこのような機能があるならば、個人の談話をデータとすることによってその個人が自己をどのように概念化し構成しているのかを捉えることができるであろう。

談話とは、協力者の“言語報告”のことである。この言語報告にはもちろん、発話も、文章も含まれる。言語報告をデータとするさいの問題点は、それが数量的・統計的な分析には適さないという点である。そのことが、新たな困難を生むことになる。言語報告を用いて、客観的で一般的な研究が行えるのかという問題である。

以下では、まずはじめに、プロトコル分析と談話分析という、言語報告をデータとする分析について概観する。

##### 4.1. プロトコル分析 (protocol analysis) と談話分析 (discourse analysis)

言語報告をデータとすることは、心理学ではその創生期から行われていた。“内観”と呼ばれる方法がそれで、19世紀後半に、WundtやTitchener、Würzburg 学派などによって展開されたものである。この内観法では、被験者に、被験者自身の意識的世界の体験をそのまま語らせようとした。そのために、被験者が意識的世界の体験をそのまま報告できるように、被験者を訓練することさえあった。この方法では、被験者によって語られた内観が、心理的な事実とみなされていた (Ericsson & Simon, 1984)。

その後内観法には、様々な問題点が指摘される (海保、1993；高橋、1993；Shannon, 1994 など)。その中でも特に注目すべきなのが、以下の点である。

- (1) ある特定の個人の心的世界についての報告は、他人のそれに関する情報を提供せず、したがって、データ及び分析結果の客観性・一般性が保証できない。

(2) 個人の心的過程（意識世界）を正確に反映しているか否か、本人にも、他人にも検証できない。

内観法の問題点は、結局のところ、データと分析がともに主観的であるという批判であった。この主観性を克服するため、心理学は、意識的世界というきわめて個人的な世界を捨て、“客観的”に観察可能な行動のみを研究対象とすることになるのは、すでに周知の事実である。研究対象を観察可能な行動に限定したことによって確かに心理学は客観的・科学的な装いを整えることになるが、その一方で、心の問題は置き去りにされてしまう。

1970年代に入って、心理学の研究は再び、人間の内的世界に注目するようになる。行動主義的心理学に代わる、認知主義的心理学の隆盛である。研究対象は、観察可能な行動から人間の認知へと変化してゆく。この研究対象の変化に呼応するように、再び、研究の主たるデータとしての言語報告が注目を集めるようになる（Ericsson & Simon, 1985）。

Ericsson & Simon (1980, 1984, 1985) では、このような人間の認知を研究するさいに行われる言語の分析をプロトコル分析と呼んだ。そして、プロトコル（言語報告）をうるための有効な方法として2つを提案する。ひとつは、直後の回想思考（retrospective thoughts）で、これは何らかの認知的処理が行われた直後に、その思考過程を言語的に報告するという方法である。そしてもうひとつは、発話思考（think-aloud）で、これは被験者が何らかの課題を遂行するさいに、その課題遂行と同時に被験者の頭のなかに浮かぶ思考を言語的に報告する方法である。彼らは、人間の認知を情報処理系とみなす理論モデルを前提として、これら2つの方法を提唱する。すなわち、人間の情報処理系は短期記憶と長期記憶に分かれること、人間の意識的な認知処理の場は短期記憶内であること、短期記憶はその容量に限界がある代わりに直接的なアクセスが可能であるが、長期記憶の検索には時間とそして推論が加わることなどである。以上のモデルをもとに人間の認知処理のプロセスを直接捉えようとするならば、短期記憶内の変化に関して言語的な報告を求めることは至極当然である。Ericsson & Simon(1980, 1984) は、発話思考が行われても、当該の課題遂行には影響を及ぼさないことも検証し、言語報告が人間の認知処理の過程を解明する上で有効であることを示した。

先にも述べたが、内観法では被験者が“X”と報告した場合、その“X”が心理的な事実とみなされる。プロトコル分析では、言語報告を、情報処理過程のある状態を言語的に報告したにすぎないと考えている。プロトコル分析にとっては、“被験者が‘X’と報告した”ということがデータなのである（Ericsson & Simon, 1984）。心理的事実は、被験者の“プロトコルを分析する”ことによって明らかになる。

談話分析も、プロトコル分析と同様、言語を分析のデータとする方法として知られている。談話分析は、古典的な修辞学を源流に、言語学の世界で発展してきた。1970年代以降の現代の談話分析では、1960年代の言語学に依拠した構造的な分析から、談話を処理する人間の認知的側面や社会・文化的側面など、文脈に依存した機能的な分析が行われるようになってきている。こうした機能的な分析では、言語学における文法的、記号論的、意味論的な概念とは異なる概念が

分析のために用いられる。例えば、認知的な側面ではプランやゴール、社会・文化的側面では、権力、役割、人種間関係などといった概念を用いて、それぞれの文脈における談話の意味が分析されている (van Dijk, 1985a, 1985b)。

以上、言語報告を分析する方法として、プロトコル分析と談話分析に言及した。表現法方は異なるが、プロトコル分析と機能的な分析を行う談話分析とは基本的には同じものではないかと考えられる。

## 5. 言語データの可能性

ここでは、社会的な構成の過程としての自己について、これを実際の談話の分析を通して検討してみる。

2種類の談話を取り上げる。ひとつは、Reicherら (Reicher, 1984; Reicher & Potter, 1985; Potter & Reicher, 1987) の暴動に関する研究からの引用である。彼らは、集団葛藤と群衆行動を検討するために、当時の新聞記事やインタビューを通して集めた談話を分析している。いまひとつは、大学生が“自己についてのイメージ”というテーマで書いたレポートである。

### 5.1. 言語データにおける“状況”

ここで取り上げるデータは、イギリス南西部の都市ブリストルで起こったセント・ポールズ暴動に関するものである。この事件について、Reicherら (Reicher, 1984; Reicher & Potter, 1985; Potter & Reicher, 1987) は、様々な談話データを用いて、主に集団葛藤と群衆行動という点から分析を試みている。従って彼らは自己に主眼を置いて分析しているのではない。しかし、状況依存性が非常に明確に表れているので、最初に状況を個人がどのように捉えているのかという点に焦点を当てて述べ、次いで自己がどのように現れているのかを述べることにしたい。

まずセント・ポールズ暴動のあらましを簡単に述べておこう。この暴動はブリストルのセント・ポールズ地区の白人の青年層と黒人が起こしたものである。1980年4月2日この地区の象徴である酒場への警官隊の不法な取り締まりに対して、白人青年たちと黒人たちが暴動を起こし、警官隊をこの地区から追い出した。続いて白人青年と黒人はこの地区にあってこの地区以外の住民が所有する物や公共物への放火や略奪を行ったのである。

Reicher & Potter (1985) は、このセント・ポールズ暴動に関する新聞やラジオ、テレビの報道記事や、その暴動に何らかの形で関係した者の談話を集め、それらのデータを暴動への非参加者(被害者と目撃者)によるものと参加者によるものの2つに分けている。そして、暴動という群衆行動が古典的な群衆心理学の説明にあるような非合理的でまとまりのないものではなく、高度に組織化されたものであると分析している。では次にReicher & Potterの論文から

(a)非参加者の談話と(b)参加者の談話をそれぞれいくつか挙げようと思う。彼らは次に述べる以上に多くの談話を挙げ詳細な分析を行っているが、ここでは特に状況の記述が明確なものだけを挙げそこに含まれている記述の違いについて簡単に注目してみたいと思う。

(a) 非参加者の談話

1. 間もなく壊されていないものは一つもなくなるだろう。〔新聞記事〕
2. それはあなたたちがニュースで見ると北アイルランドに似た状態でした。黒人のギャングと白人の若者はトラブルを探してうろろうとしていました。〔白人女性〕
3. たくさんの人々が通りに駆け降りてきて、ガラスを割って車を壊していた。〔地元のパブ経営者〕
4. 今夜私たちは大けがをした警官たちを見た。〔学校用務員〕
5. 道路にはガラスや石が散乱していた。辺りには警官たちが顔から血を流して倒れていた。〔地元のパブ経営者〕

(Reicher & Potter, 1985, p.177-178)

これらの談話を行ったのは、暴動を行っている側ではない被害者や目撃者（あるいは傍観者）である。そこに共通して見られるものは、物の破壊やけが人の様子であり暴動の事態に関する客観的事実の記述である。

6. 私は暴動のまっただ中にある。私と家族は殺されかけている。若い奴らの多くは統制が効かなくなっている。奴らは凶暴化している。奴らは家や店に火をつけ車を壊している。〔新聞記事〕
7. 私はそこに立って見ていました。それは恐ろしく脅威的なものでした。ロンドンやリーズやコベントリから来た人々は警官を撃つために銃が持ち出されるという噂をしていました。〔白人女性〕
8. まさにあなたの心をよぎったことは、民族戦争に発展するかも知れないということでした。〔白人男性、35歳〕

(Reicher & Potter, 1985, p.177-178)

これらの談話には暴動の事態に関する客観的な記述（6の「奴らは家や店に火をつけ車を壊している。」）も見られるが、もうひとつ6の「私と家族は殺されかけている。」や7の「それは恐ろしく脅威的なものでした。」、8の「民族戦争に発展するかもしれない」などのような暴動の事態への恐怖の記述が共通して見られる。

(b) 参加者の談話

9. まだ全体的に雰囲気は対警官というものだった。それは新聞が報道しているような完全に狂った群衆といったものではなかった。全員が一緒であった。全員が常にお互いを見ていた。黒人も白人も老いも若きもである。それはすばらしいことだった。〔白人女性、25歳〕
10. あなたが警官の制服を来ていなかったならば大丈夫だよ。〔白人男性、20歳〕
11. 警官が俺たちを抑えることなんてできない。奴らが戦い始めたのである。警官こそが悪者なのである。〔黒人男性、17歳〕

(Reicher & Potter, 1985, p.182-183)

これらは実際に暴動を行っていた者たちの談話である。ここには攻撃の対象が警官だという状況の記述が共通して見られる。また9の談話には「全員が一緒であった。全員が常にお互いを見ていた。」という暴動を行っている集団が一体化していたという記述が見られる。加えて「それはすばらしいことだった。」という一体化していた際の雰囲気を賞賛する記述も見られる。このような記述は次の談話にも見られる。

12. 人々はとても暖かかった。彼らは「兄弟、君と一緒にいられて嬉しいよ」と言い、抱きしめていた。〔白人男性、35歳〕
13. 大体は一つになっているという感じだった。つねに人々は非常に親しくしていた。〔白人男性、20歳〕
14. みんながお互いにならずき合い微笑み合いながら歩き回っていた。それは本当にすばらしいことだった。〔白人女性、20歳〕

(Reicher & Potter, 1985, p.182-183)

これらの談話を見てみると状況の捉え方の違いがはっきりと表れていることがわかる。同じ暴動の事態に対して非参加者は事実の客観的記述や恐怖感を述べ、参加者は攻撃の対象が警官であったことや集団が一体化していてそれがすばらしいことだったという賞賛を述べている。各々の個人が置かれた立場によって、同じ事態でもその認知の内容やそれから喚起される感情が違ってくるのである。つまり、各個人によって状況の意味が違ってくることもあり得るのであり、談話をデータとして用いることでその違いを直接的に明確に捉えることが可能なのである。

また上の談話データからはセント・ポールズ地区の地域集団のメンバーの一体感がうかがえるが、このことは暴動の参加者のこの地域集団への所属意識を意味していると思われる。所属意識とはアイデンティティに関連する自己の一側面である。また次の談話データにはこの地域

集団への所属意識と暴動での警官に対する勝利から肯定的な自己評価が生じていることがうかがえる。

15. 私たちは警察に挑戦して奴らをやっつけた。奴らはもう二度と私たちを軽蔑しないだろう。  
…奴らは今では私たちを尊敬しているだろう。〔黒人男性〕
16. 私たちはすごいと感じており、勝利を得たと確信している。私たちは勝利を得るのにふさわしかったのだ。〔黒人男性〕
17. あなたたちは学校に行き学ぶが、私たちには何もない。肌の色がすべてのことを決定しているのだ。私たちは法廷で奴ら（警官などのセント・ポール地域以外の人々のこと）に勝つことはできないが、通りで奴らをやっつけたのだ。〔黒人男性〕（ ）内は筆者による補足  
(Reicher, 1984, p.16)

15の「奴らは今では私たちを尊敬しているだろう。」や、16の「私たちは勝利を得るのにふさわしかったのだ。」、また17の「私たちは法廷で奴らに勝つことはできないが、通りで奴らをやっつけたのだ。」の部分は、肯定的な自己評価が行われていることを示していると思われる。

上記の地域集団への所属意識と肯定的な自己評価は、暴動を起こす側にいたという状況と密接に関連しているものである。自己の表れ方には状況が大きく作用しており、自己を研究しようとする際にはその時の状況を含めた分析が非常に重要になってくるように思われる。このように談話を用いたデータを用いると、個人の状況の意味付けの仕方が直接捉えられるだけでなく、それと密接に関連した自己の側面をも捉えることができるのである。少なくともそうできる可能性はあると言えよう。

Reicher & Potter (1985) は、同じ暴動という“状況”が、個人によってまったく違って受け取られるということ、その違いが、談話（新聞記事、インタビューなど）を分析することによって明らかになることを示した。本研究では、同じ談話を使って、さらに、状況とのかかわり（相互作用）によって捉えられる自己（社会構成的自己）の姿を推測した。

## 5.2. 言語データにおける“自己”

次に、正面から“自己”について語られている談話を検討してみる。

ここで取り上げるのは、3名の大学生のレポートである。テーマは、“自己についてのイメージ”で、分量としてはA4版用紙1枚程度であった。このレポートは、四年制大学の二年生を対象に開講された授業（必修科目）での課題である。この授業は演習形式で行われ、班ごとに「自己」について書かれた本（この授業は、“演習”という学習形態の学習を目的として組織されている。したがって、履修者は心理学を専攻しているわけではない。そのため、取り上げた本はすべて新書であった）を読み、分担してレジユメの作成と報告を行った。また授業中に、報告の内容に応じて適宜テーマを選び、自由な討論を行った。

1. . . . 自己を作るのは自分自身の割合よりも、外部から受ける割合が大きくなるのではないかと思います。(男子学生B)
2. 高校生になると、かなり国際色豊かな環境になったぶん、自己についてさらに考え出した。‘Be yourself’ とか、国を越えたグローバルな考え方が自己の中に入り込んできた。(女子学生C)
3. . . . 多くの人々に出会った色々な体験の中から、「私の私自身についての認識」が形づくられていっているように感じています。(女子学生A)

上の3つの引用は、自己の形成過程に言及している。自己が、状況（1.では“外部”、2.では“環境”、3.では“多くの人々に出会った色々な経験”という言及が見られる）を取り込みながら形成されてきた、という経験を語っている（a.は、b.やc.に比べると、自らの経験を語っているのか一般論を語っているのか判断に困る側面があるが、前後の文脈から個人的経験を語っているものと判断した）。これらの引用からは、自己を内省的に観察したときに、そこに見えてくるのが、他からは独立した実体としての自己ではなく、各自のおかれていた状況（社会的文脈、価値観など）を映す、いわば鏡のような自己だということである。

4. . . . 、他人から見られることによってまだ知ることのなかった自己を見つけることができます。(男子学生B)
5. 自己というものは私自身よくわからない。状況に応じてカメレオンのように変化していく。そしてたいがいの場合、私はどれが本当の自己なのかよくわかっていない。(女子学生C)

この2つの引用では、他からは独立した自己を探すという試みが、必ずしも成功しないことを物語っている（4.では、“まだ知ることのなかった自己”、5.では“どれが本当の自己なのか”という表現がみられる）。内面に向かって社会的文脈や他者の存在を捨象して、実体としての自己を探そうとすればするほど、それが何であるのかをつかめなくなるというのである。おそらく、そこに存在しているのは、認識しているという感覚だけで、その認識の対象がつかめないというのである。

6. 自己発見は、本とかを読んで納得してあてはめるのではなく、生身の人間を通して己を知っていくということがつとり早いし、また悩むだろうが生きているんだなあ実感するのだと思う。(女子学生C)

この引用では、自己を“実感”するというきわめて主体的な認識が、他者との相互交渉の場で生じていることを示している。

7. . . . それ（「私の私自身についての認識」一筆者注一）は自分の中に普遍的に存在し自然と沸き上がってきたようなものではないように感じています。 . . . （中略） . . . 私以外の人が私に対して抱いているそれとの比較において自分の中で決定づけられている . . . .

（女子学生A）

8. ‘他人の目にはどう映るのだろうか？’ と考える状況におちいった時、それでもどうしても自分の信念を通したい時に必ずといっていい程このセンテンス “——WHO CARES???” がでてくる。（女子学生C）

この2つの引用では、自己を認識しようとするさいに気づく“他者”について言及している。ここで言及されている“他者”は、特定の個人を指す場合もあろうし、そうでない場合もあろう。そして、“他者の目に映る”私は、実際に指摘されたものであるかもしれないしそうでないかもしれない。つまり、7.と8.で指摘されている他者は、いわば“自己の内に棲む”他者である。他者が私についてどのような認識を持っているのか、という事に関する私の知識である。そこで捉えられている自己は、他者との関係のなかに映し出されている。自己という独立した存在を捉えようとするほど、そこに現れてくるのは“他”であり、他との“関係”なのである。自己を捉えようとするとき、捉えられるのは、これまで考えられてきたような“実体”としての自己ではなく、“関係”として自己であることを、これらの引用は物語っていないだろうか。

さて、レポートを作成した学生は、演習中、本研究で展開されている議論の一端に触れている。その意味で、演習がレポート作成に影響を与えている可能性は大きい。その意味では必ずしもナイーブな談話とは言えないかもしれない。

また、“自己についてのイメージ”というテーマは、いわば、“自己とはなにか”を問うことと同じである。きわめて抽象的な質問であり、“状況との相互作用を通して構成される自己”を論じるには、談話そのものがやや一般論を述べている傾向が強かった。さらには、直接的に“自己”を語らせることは、少なくともそこに、明確な社会的文脈が存在しないという意味において、“自己”を語ることにならないかもしれない。

こうした問題点に加えて、分析が妥当であったのかということの検証も、現段階では難しい。そのような解釈も成り立つ、という程度の分析でしかないかもしれない。

それでも、引用した談話を通して見える自己は、実体としての自己ではなく、状況との関係をとおして構成された自己として解釈する方が妥当なように思われる。

## 6. 今後の課題

本研究の目的は、状況依存的自己が談話の分析を通して捉えられるか否か、その可能性を探ることにあつた。現段階では、十分な検討ができたとは言いがたい。しかしながら、我々が進めてゆこうとする研究の方向性は示せたのではないかと思う。

ここでは、今後の課題として以下の3点をあげておく。まず第一に、状況依存的自己がどのような自己であるのか、伝統的な諸理論との差異が必ずしも明確ではない。伝統的な諸理論も、個人と状況との関連を重視していることには変わらない。Combs & Snygg (1959) やRogers (1951) も、状況の捉え方が個人によって異なるという点には着目しており、その点では、本研究において提示した状況依存的自己の考え方と近いものがある。今後は、これらの考え方の相違点をさらに明確にするとともに、状況依存的自己をより明確に理論化することが必要であろう。第二に、状況依存的自己を捉えるためになぜ談話を取り上げなければならないのか。Potter & Wetherell (1987) やHarré (1993) は、言語そのものに、自己と状況とを結びつける機能があると仮定している。この仮定が妥当なものか否か、検討の余地であろう。そして第三に、言語報告をデータとする談話分析という方法論そのものを曖昧な理論化のまま使用していることである。プロトコル分析を含め、言語データを分析する方法論の検討が必要であろう。

## Reference

- Allport, G. W. 1955 *Becoming*. New Heaven: Yale Univ. Press (オルポート・G・W 豊沢 登 (訳) 1959 人間の形成 理想社)
- Combs, A. W. & Snygg, D. 1959 *Individual Behavior: A Perceptual Approach to Behavior*. New York: Harper & Row (コムズ・A・W & スニッグ・D 友田不二男 (訳編) 1970 人間の行動——行動への知覚的アプローチ 岩崎学術出版)
- Ericsson, K. A. & Simon, H. A. 1980 Verbal Reports As Data, *Psychological Review*, 87, 215-251
- Ericsson, K. A. & Simon, H. A. 1984 *Protocol analysis: Verbal reports as data*. Cambridge: MIT Press
- Ericsson, K. A. & Simon, H. A. 1985 Protocol Analysis. In *Handbook of Discourse Analysis* Vol.2, 259-268. London: Academic Press.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. New York: International Universities Press (エリクソン・E・H 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Gergen, K. J. 1973 Social Psychology as History, *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 309-320
- Gergen, K. J. 1991 *The Saturated Self: dilemmas of identity in contemporary life*. Basic Books
- Gergen, K. J. 1987 The Social Construction of Selves, In Yardley, K. & Hones, T.(eds.) *Self and Identity: Psychosocial Perspectives*, 41-52 New York: John Wiley & Sons
- Gergen, K. J. & Gergen, M. M.(eds.) 1984 *Historical Social Psychology*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates
- Harré, R. 1993 *Social Being*(2nd ed.). Oxford: Blackwell
- James, W. 1968 The Self, In Gordon, C. & Gergen, K. J.(eds.), *The Self in Social Interaction*, 41-49. New York: John Wiley & Sons
- 海保博之 1993 プロトコル分析の過去、現在、未来——内観法からエスノメソドロジーまで 海保博之・原田悦子 (編) プロトコル分析入門 新曜社 Pp.1-10.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Mead, G. H. 1934 *Mind, Self and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*. Chicago: Chicago Univ. Press (ミード・G・H 稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収 (訳) 1973 精神、自我、社会 青木書店)
- 中村陽吉 (編) 1990 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- Potter, J. & Reicher, S. 1987 Discourses of community and conflict: The organization of social categories in accounts of 'riot' , *British Journal of Social Psychology*, 26, 25-40
- Potter, J. & Wetherell, M. 1987 *Discourse and Social Psychology: Beyond Attitudes and Behaviour*. London: Sage Publication
- Reicher, S. & Potter, J. 1985 Psychological Theory as Intergroup Perspective: A Comparative Analysis of

- “Scientific” and “Lay” Accounts of Crowd Events, *Human Relations*, 38, 167-189
- Reicher, S. D. 1984 The St. Pauls’ riot: an explanation of the limits of crowd action in terms of a social identity model, *European Journal of Social Psychology*, 14, 1-21
- Rogers, C. R. 1951 *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications and Therapy*. Boston: Houghton (ロジャース・C・R 友田不二男 (訳) 1966 精神療法 岩崎学術出版)
- Sampson, E. E. 1985 The Decentralization of Identity: Toward a Revised Concept of Person and Social Order, *American Psychologist*, 40, 1203-1211
- Sampson, E. E. 1989 The Challenge of Social Change for Psychology: Globalization and Psychology’s Theory of Person, *American Psychologist*, 44, 914-921
- Shannon, B 1984 The case of introspection. *Cognition and Brain Theory*, 7(2), 167-180.
- 高橋秀明 1983 プロトコルからわかること・わからないこと 海保博之・原田悦子 (編) プロトコル分析入門 新曜社 Pp.58-76.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- van Dijk, T. A. 1985a Introduction: Discourse Analysis as a New Cross-Discipline. In *Handbook of Discourse Analysis* Vol.1, 1-10. London: Academic Press
- van Dijk, T. A. 1985b Introduction: Levels and Dimensions of Discourse Analysis. In *Handbook of Discourse Analysis* Vol.2, 1-11. London: Academic Press
- Widdicombe, S. & Wooffitt, R. 1990 ‘Being’ versus ‘Doing’ Punk: On a Achieving Authenticity as a Member, *Journal of Language and Social Psychology*, 9, 257-278
- Widdicombe, S. & Wooffitt, R. 1995 *The Language of Youth Subcultures: Social Identity in Action*. London: Harvester Wheatsheaf